

『洋酒天国』寿屋 1956(昭和31)年

当財団の「アドミュージアム東京」に所蔵された多彩なPR誌から、今回は寿屋の『洋酒天国』をピックアップ。どのように企業の個性を表し、時代を捉えているかを探る。



創刊号の表紙には、酒飲みたちが時空を超えて集合。柳原良平の手による切り絵を配し、シンプルでありながら、カラーコントラストを効かせた印象的な仕上がりが



創刊号のカクテルをテーマにした2企画は、共におすすめレシピを伝えるもの。レシピといい、付けられた名称といい、クリエイティブあふれるラインアップ

編集部は傑物ぞろい

寿屋(現・サントリー)のPR誌『洋酒天国』は、ウイスキーなどの洋酒の魅力を広めるために昭和31年に発刊されました。

編集責任者は、当時宣伝部に属していた開高健です。後に芥川賞作家として名をはせる開高らしく、自由奔放な編集スタイルが読む者を楽しませます。編集には、後に直木賞作家となる山口瞳や、『アンクルトリス』のキャラクターを生むイラストレーター柳原良平も携わっていました。

本誌からは、かつての「労働者による居酒屋文化」から「都市サラリーマンのバー文化」を創り出す、先兵のような野心が伝わってきます。居酒屋で飲む酒が仕事の憂さを晴らす、どちらかといえば“重い”酒なのに対し、バーで飲む酒は会話や一人の時間を楽しむ“軽い”酒ともいえるでしょう。『洋酒天国』はそのような酒の世界へのガイド役を果たしました。

創刊号(第1号)は、柳原良平によるモダンで洗練された表紙と豪華な執筆陣が印象的です。

写真家・木村伊兵衛による「パリの小さい酒場」は、写真と文章で、パリの人々の

ワインへの愛を伝えています。「日本にはこのブドウ酒の味はないだろうから、ここを離れられない」という現地の人の言葉が印象的な味わいのあるページです。

「蚤の市・パイプコレクション公開」では、政治家・実業家の高橋龍太郎の逸品がずらりと並びます。

「私の Cocktail」は、漫画家・横山隆一の「チェリスマイル」と、女優・小夜福子の「ミスティ・グリーン・フィズ」を紹介します。2人の処方したカクテルが、リアリティのある写真とレシピで紹介されています。

「女性に好かれる Cocktail」では、自分の好きなように色、味、香りが工夫できるカクテルの魅力を、女性向きのレシピを紹介することによって伝えます。「エンゼルキス」「クイーンエリザベス」「青春の夢」など5種のカクテルの作り方が紹介されています。

巻末には「ノーマル賞を設けました!」の見出しで、自作のカクテル・コンクールへの応募を呼びかけています。バーや家族で手軽に洋酒になじんでもらいたいという企画です。「かならず、なにか面白い名前をつけてください」という条件からは、編集者のセンスが伝わってきます。

「乱反射」というタイトルの編集後記には、「この雑誌は、寿屋の洋酒チェーンのバーを通じて毎月配布いたします」「なにぶん創刊号のこととて、酒に関する事柄が主となりましたが、次号より生活を楽しく豊かにするアクセサリの話など趣味あふれた内容のもの、古今東西を問わず折り込んでゆきたい」と抱負が記されています。

捨てるには“随分と惜しい”内容満載

第2号の内容はもっとこなれて面白くなっています。執筆者も編集者もコツを掴みできたのでしょうか。冒頭の言葉「お読みになった後、どこか本棚の隅にでもそっと保存しておいてやってください。捨てるにはちょっと惜しい小冊子です」が、印象的です。

「蚤の市・コレクション公開」では、画家・伊勢正義の貝のコレクションが掲載されています。中には、20年以上かけてやっと手に入れた一品もあります。冒頭には、ジャン・コクトーの詩「私の耳は貝の殻海の響きをなつかしむ」を地でいくようなフランス人の貝殻への思いが紹介されています。

Yoshiro Okada

1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。コーポレートアイデンティティ室長などを経て98年退職。70年の大阪万博では、「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』（電通）、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』（講談社）など。

画家・鈴木信太郎の「阿蘭陀(オランダ)人の図」は、長崎で出島の跡を探すところから始まります。わずかに残る、当時のオランダ屋敷の面影から、「室内に椅子や食卓が並び、異国の酒瓶やコップが輝く情景は、当時の日本人には驚異な世界であっただろう」と思いをはせています。

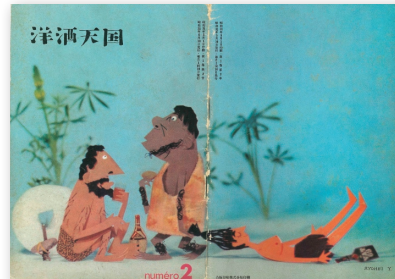
随筆家・春山行夫の「西洋合財袋② バッカス」は、紀元前、バッカス祭が禁止されてカーニバルやクリスマスが生まれたいきさつや、クリスマスも昔はお祭り騒ぎをしたが、16世紀あたりから家庭本位の祭りになったことなど、興味あるエピソード満載です。

作家・北原武夫の「或る夜の銀座」は、銀座のバーのウエートレスがみな中国服を着ている謎を探る話です。直前に封切られた映画『慕情』の主演女優ジェニファー・ジョーンズが着ていた中国服の影響でしょうか。『ローマの休日』がヒットしたときは同様にウエートレスたちにすぐ断髪がはやったように、流行の先端を行く銀座のバーの様子を観察しています。

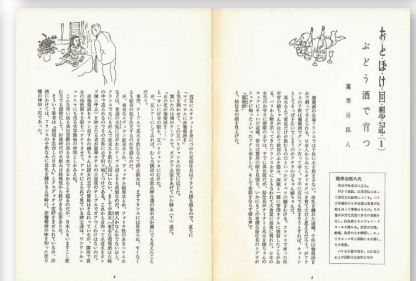
漫画家・富田英三の写真と文による「ニューヨークの酒場」は、グリニッチ・ヴィレッジの酒場「グラナドス」の魅力を伝えます。静かに語り、独りで楽しむ酒場と異なり、徹夜で騒々しく騒ぐ、一風変わった存在として忘れられない、という印象を伝えています。

「日曜大工の日曜酒場 1,050円でできるホーム・バー」は、半日で作れる洋酒棚の作り方の案内です。若い編集部員たちの発案らしく、つつましい値段で簡単にできる現実的なものとなっています。背景にある「遊び下手な日本人の考えを変える工夫」という意図が興味深いです。

編集後記の「酔族館」では、大阪に登場した屋台バーや、長崎の名酒場「ボン・ソ



上:立体的な紙製人形で表現した創刊2号の表紙も柳原作。下:「蚤の市・コレクション公開」では、画家の伊勢正義の收藏品として貝を紹介。二十数年かけて集められたコレクションは、見応え十分



上:手の込んだ立体オブジェが目を引く創刊3号の表紙。下:明治34年に生まれ、18歳で渡欧したバロン薩摩と薩摩治郎八が語る、フランスの成熟したワイン事情。シニカルな切り口が笑いを誘う

ワール」を、銀座にもないくらいの凝った酒場、と評して紹介しています。

2人の国際派日本人が酒を語る

第3号には、話題性豊かな人物が登場します。冒頭には、「バロン薩摩」とよばれる、18歳での渡欧以降、フランスでのしゃれた暮らしが有名だった薩摩治郎八の「お・と・ば・け・回・想・記(1)ぶどう酒で育つ」が登場します。「ぶどう酒の本場フランスでは子供に水を飲まさない」という言葉で始まります。国際人として名をとどろかせた薩摩の「真水なんて家畜だけが飲むものだ」「日本人もいますこし飲む方でも国際化して、封建時代の水飲み百姓根性から抜けきる必要あり」「自分の体験から日本の子供に純粋な葡萄酒を与えよと断言する。国民保健のカギはこれだ」など独特のワイン礼賛論を展開します。

国際的映画俳優・早川雪洲の「呑んべは呑んべで」は、「飲み道楽である私は、海外生活四十年に亘って殆ど世界各国の酒を飲み歩いた」という文章で始まります。いかに酒が暮らしに必需品となっているか、酒の文化を自らの思い出を交えて語ります。

巻末には「第一回ノメール賞」の発表があります。最高賞は「ゴジューサンツギ」という名のジンを抹茶とソーダで割ったカクテルが受賞しています。また、審査エピソードとして、日本全国から沢山の応募があり、一つずつ考案されたレシピに沿ってカクテルを作って試飲したので、編集部員一同が完全に「ドランキーになった」、といううれしい悲鳴が述べられています。

『洋酒天国』は、その後、1963(昭和38)年1月まで発行されました。寿屋の自由闊達で遊び心いっぱいの企業文化は、PR誌という枠を超えて幅広い支持を得ました。